

留学体験報告

Q. 今回の留学の最も大きな収穫は何でしたか？

勇気を持って自ら行動する力を得たことです。これが、今回の留学で得た最も大きな成果だと思います。自分から動かなければ何も始まらないことが分かりました。語学学校は昼過ぎに終わります。最初は、放課後の自由時間の過ごし方が分かりませんでした。だんだん自分から、現地で友達をつくる努力から始め、活動を拡げていきました。図書館でのボランティア、幼稚園でのダンスの講師、ダンスサークルへの参加、現地病院や孤児院の見学等、たくさんの体験を積むことができました。行動に移すことは、想像するよりも難しいことでした。実行に移す前に怖くなって諦めてしまいそうになったこともあります。そんな時は、楽観的な思いを優先させ、失敗を恐れないようにしました。勇気をもって自ら行動することで、私の世界が大きく拡がりました。

Q. 文化の異なるフィジー共和国で暮らすことで何か感じたことがありますか？

新しい国で受け入れられるには、そこで暮らす人々の立場で考えることが大切だと感じました。自分が実際にいるんな所に足を運ぶこと、自分の目で人々の暮らしを見ること、そこで暮らす人々から直に話を聴くことが、現地の人々を理解するには重要でした。現地の暮らしに慣れて見えてきたことは、フィジーには異なる2つの文化を持つ人々がいるということでした。フィジアンとインディアンです。

両者の暮らしには経済的な豊かさという点で、大きな格差を感じました。この差は、人々の価値観等にも大きく影響していました。孤児院の見学をした時に、そこで暮らす子どもたちの多くがインディアンだと知りました。その理由は、家族の在り方や他人の受け入れ方に、両者では文化的な違いがあるからでした。インディアンは血縁関係を重視し、血のつながりがない他者を家族とはみないそうです。また、勉強や労働に価値をおいています。実際のフィジーの経済を指揮する多くはインディアンでした。一方、フィジアンは血縁関係に関係なく他人の子どもでも引き取り、自分の子どもとして育てることがあるそうです。大家族で、子どもの教育や働くことにも、さほど熱心ではないようです。けれど、その中で暮らすフィジアンにとっては、当たり前前の生活で幸せそうで、特に困っている訳ではないのです。この体験は、国際的な現場で将来助産師として働きたい私にとって、地域で暮らす人々の支援を考える際に、人々の背景や文化を知ることが重要になるという学びになりました。

Q. 最後に看護学生としての今の気持ちを教えてください。

私は看護学科では1年次の学修を終えたばかりだったので、看護の専門についての知識はありません。しかし、今回、フィジーのナンディー病院の産科病棟を見学し、産後間もないお母さんと赤ちゃんの姿を見た時は、場所が変わっても、やはり自分は助産師になりたい

なという思いを強く感じることができました。またオーストラリアでは、本学との提携校であるキャンベラ大学のキャンパスを来訪しました。そこで、病院見学や学生たちとのミーティングに参加する機会も得ました。キャンベラ大学では子育てをしながら勉強する学生や留学生も多く、年齢も、国籍も、様々な学生と一緒に看護の勉強をしていることを知り、国を超えて同じ看護を目指す気持ちに一体感を感じました。また、オーストラリアの医療を見学して、フィジーの医療現場とは違い衛生面が整えられていること、日本の看護師の忙しいというイメージとは違って、ここの看護師たちがゆとりを持って患者に対応していることを見て、こうした違いはなぜだろうかという疑問を持ちました。本学の2年生に戻って日本の医療、世界の医療について学びたいという気持ちが高まりました。

今回の留学は、多くの方のご支援のもと実現することができました。最初は、留学に対して一番反対していた家族も、最終的には「自分らしくいなさい」と言って背中を押してくれ、留学中はその家族からの手紙が励みとなりました。最後になりましたが、支えていただきました多くの方々に心から感謝いたします。